Ⅳ・白文に挑戦（その４）

2024.05.23

by kenzou

1 『不死』中国戦国時代・韓非子　外儲説

客有教燕王為不死之道者。王使人学之。所使学者、未及学而客死。王大怒誅之。王不知客之欺己、而誅学者之晩也。夫信不然之物、而誅無罪之臣、不察之患也。且人所急無如其身。不能自使其身無死、安能使王長生哉。

●人所急←人の急なる所：人の一番大切なところ

客に燕王に不死の道を為すを教ふる者有り。王人をして之を学ばしむ。学ばしむるの所の者、未だ学ぶに及ばずして客死す。王大いに怒りて之を誅す。王客の己を欺くを知らずして、学ぶ者の晩きを誅するなり。夫れ然らざるの物を信じて、無罪の臣を誅するは、察せざるの患ひなり。且つ人の急する所は其の身に如くは無し。自ら其の身をして死無からしむること能わずして、安んぞ能く王をして長生せしめんや。

2 『正義』（世説新語）南朝宋・劉義慶

荀巨伯遠看友人疾、値胡賊攻群。友人語巨伯曰、「吾今死矣。子可去」。巨伯曰、「遠来相視、子令吾去。敗義以求生、豈荀巨伯所行耶」。賊既至、謂巨伯曰、「大軍至、一群尽空。汝何男子、而敢独止」。巨伯曰、「友人有疾、不忍委之。寧以我身代友人命」。賊相謂曰、「我輩無義之人、而入有義之国」。遂班軍而還。一群並獲全。

○荀巨伯＝人名。○値う＝遭遇する。○委てる＝すておく。委棄。○班す＝引き戻す。

荀巨伯遠く友人の疾を看るに、胡賊の群を攻むるに値ふ。友人巨伯に語りて曰はく、「吾今死せんとす。子去るべし」と。巨伯曰はく、「遠く来たりて相ひ視るに、子吾をして去らしむ。義を敗りて以て生を求むるは、豈に荀巨伯の行ふ所ならんや」と。賊既に至り、巨伯に謂ひて曰はく、「大軍至らば、一群尽く空しからん。汝何なる男子にして、敢て独り止まる」と。巨伯曰はく、「友人疾有り、之を委つるに忍びず。寧ろ我身を以て友人の命と代へん」と。賊相謂ひて曰はく、「我が輩無義の人にして、有義の国に入らんや」と。遂に軍を班して還る。一群並びに全きを獲たり。

3 『先見』（世説新語）南朝宋・劉義慶

華歆王朗俱乗船避難。有一人欲依附。歆輒難之。朗曰、「幸尚寛、何為不可」。後賊追至。王欲舎所携人。歆曰、「本所以疑正為此耳。既已納其自託、寧可以急相棄邪」。遂携拯如初。世以此定華王之優劣。

○華歆・王朗＝共に人名。○依附＝寄り添って頼ること。○疑う＝ためらう。●納其自託←その人の頼みを受け入れる。○携拯＝連れて助ける。

華歆王朗俱に船に乗り難を避く。一人有りて依附せんと欲す。歆輒ち之を難ず。朗曰はく、「幸ひに尚ほ寛し、何為すれぞ不可ならん」と。後賊追ひて至る。王携ふる所の人舎てんと欲す。歆曰はく、「本より疑ひし所以は正に此れが為のみ。既に已に其の自託を納る、寧んぞ急を以て相棄つべけんや」と。遂に携拯すること初めの如し。世此れを以て華王の優劣を定む。

4 『教育』（韓非子）中国戦国時代・韓非子

曾子之妻之市。其子随之而泣。其母曰、「女還。顧反為女殺彘」。適市来。曾子欲捕彘殺之。妻止之曰、「特与嬰児戯耳」。曾子曰、「嬰児非与戯也。嬰児非有知也。待父母而学者也。聴父母之教、今子欺之、是教子欺也。母欺子而不信其母、非所以成教也」。遂烹彘也。

○曾子＝孔子の弟子。孝の道（親孝行）に秀でていた。○適く＝ゆく。おもむく。○特＝わずか。

曾子の妻市へ之く。其の子之に随ひて泣く。其の母曰はく、「女還れ。顧反らば女が為に彘を殺さん」と。市に適て来たる。曾子彘を捕へて之を殺さんと欲す。妻之を止めて曰はく、「特嬰児と戯れしのみ」と。曾子曰はく、「嬰児は与に戯るべきに非ざるなり。嬰児は知有るに非ざるなり。父母を待ちて学ぶ者なり。父母の教を聴くに、今子之を欺かば、是れ子に欺くことを教ふるなり。母子を欺きて其の母を信ぜざるは、教えを成す以所に非ざるなり」と。遂に彘を烹るなり。

5 『方士』（夢渓筆談） 北宋・沈括

賈魏公為相日、有方士姓許、対人未嘗称名、無貴賤、皆称我、時人謂之許我。言談頗有可採、然傲誕視公卿蔑如也。公欲見、使人邀之、数四卒不至。又使門人苦邀、致之。許騎驢、逕欲造丞相庁事門、吏止之不可。吏曰「此丞相庁門、雖丞郎亦須下」。許曰「我無所求於丞相、丞相召我来。若如此、但須我去耳」。不下驢而去。門吏急追之、不還、以白丞相。魏公又使人謝而召之、終不至。公歎曰「許市井人耳、惟其無所求於人、尚不可以勢屈。況其以道義自任者乎」。

○方士＝瞑想、占い、気功、錬丹術、静坐などの方術によって不老長寿を目指した修行者。○賈魏＝後漢末期から三国時代の政治家・武将。●苦に←懸命に。○逕ちに＝直ちに。

賈魏公相為りし日、方士の姓許なる有り、人に対して未だ嘗て名を称せず、貴賤と無く、皆我と称し、時人之を許我と謂ふ。言談頗る採るべき有るも、然れども傲誕にして公卿を視ること蔑如なり。公見んと欲し、人をして之を邀へしむるも、四を数へて卒に至らず。又門人をして苦に邀へしめ、之を致す。許驢に騎して、逕ちに丞相の庁事門に造らんと欲するに、吏之れを止めて可とせず。吏曰はく「此れ丞相の庁門にして、丞郎と雖も亦た須らく下るべし」と。許曰はく「我丞相に求むる所無し、丞相我を召して来たらしむ。若し此の如くんば、但だ我が去るを須つのみ」と。驢を下らずして去る。門吏急ぎて之を追ふも、還らず、以て丞相に白す。魏公又人をして謝して之を召さしむるも、終に至らず。公歎じて曰はく「許は市井の人のみ、惟だ其れ人に求むる所無きのみにして、尚ほ勢を以て屈すべからず。況んや其の道義を以て自任せる者をや」と。

6 『辞退』（列子） 中国戦国時代・列禦寇

子列子窮、容貌有飢色。客有言之鄭子陽者。曰、「列禦寇蓋有道之士也。居君之国而窮。君無乃為不好士乎」。鄭子陽即令官遣之粟。子列子出見使者、再拝而辞。使者去、子列子入。其妻望之而拊心曰、「妾聞、為有道者之妻子、皆得佚楽。今有飢色、君遇而遣先生食。先生不受。豈不命也哉」。子列子笑謂之曰、「君非自知我也。以人之言而遣我粟、至其罪我也、又且以人之言。此吾所以不受也」。

子列子窮し、容貌飢色有り。客に之を鄭の子陽に言ふ者有り。曰はく、「列禦寇は蓋し有道の士なり。君の国に居りて窮す。君乃ち士を好まざるを為す無からんや」と。鄭の子陽即ち官をして之に粟を遣らしむ。子列子出でて使者を見、再拝して辞す。使者去り、子列子入る。其の妻之を望み心を拊ちて曰はく、「妾聞く、有道者の妻子為るもの、皆佚楽を得。今飢色有り、君遇して先生に食を遣る。先生受けず。豈に命ならざらんや」と。子列子笑ひて之に謂ひて曰はく、「君自ら我を知るに非ざるなり。人の言を以て我に粟を遣る、其の我を罪するに至るや、又且に人の言を以てせんとす。此れ吾の受けざる所以なり」と。

7 『名手』（帰田録） 宋・欧陽修

陳康粛公堯咨、善射、当世無双、公亦以此自矜。嘗射於家圃。有売油翁、釈担而立、睨之、久而不去。見其発矢十中八九、但微頷之。康粛問曰、「汝亦知射乎。吾射不亦精乎」。翁曰、「無他、但手熟爾」。康粛忿然曰、「爾安敢軽吾射。」翁曰、「以我酌油知之」。乃取一葫蘆置於地、以銭覆其口、徐以杓酌油瀝之。自銭孔入、而銭不湿、因曰、「我亦無他、惟手熟爾」。康粛笑而遣之。

〇陳康粛公堯咨＝北宋の政治家。科挙に首席で合格し地方官と・中央官を歴任するも強情な性格が災いし屡々左遷の憂き目を見る。「宋史」に弓の名人として名を残す。〇釈く＝とく。ほどく。

陳康肅公堯咨、射を善くすること、当世無双、公も亦た此れを以て自ら矜る。嘗て家圃に射る。油を売る翁有り、担を釈きて立ち、之を睨み、久しく去らず。其の矢を発して十に八九を中つるを見、但だ微かに之に頷く。康肅問ひて曰はく、「汝も亦た射を知るか。吾が射亦た精ならずや」と。翁曰はく。「他無し、但だ手の熟するのみ」と。康肅忿然として曰はく、「爾安くんぞ敢て吾が射を軽んずる」と。翁曰はく、「我が油を酌むを以て之を知れり」と。乃ち一葫蘆を取りて地に置き、銭を以て其の口を覆ひ、徐に杓を以て油を酌み之に瀝ぐ。銭孔より入りて、銭湿らず、因りて曰はく、「我も亦た他無し、惟だ手の熟するのみ」と。康肅笑ひて之を遣す。

8 『陰徳』（列女伝） 前漢末期・劉向

淑敖為嬰児之時、出遊見両頭蛇、殺而埋之。帰見其母而泣焉。母問其故。対曰、「吾聞、見両頭蛇者死。今者、出遊見之」。其母曰、「蛇今安在」。対曰、「吾恐他人復見之、殺而埋之矣」。其母曰、「汝不死矣。夫有陰徳者、陽報之。徳勝不祥、仁除百禍。天之処高而聴卑。書不云乎、皇天無親、惟徳是輔。爾嘿矣。必興於楚」。及叔敖長為令尹。君子謂、叔敖之母、知道徳之次。

○孫叔敖＝春秋時代・楚の荘王の家臣。富国強兵策により楚を天下の覇者とした。楚屈指の賢相の一人。

淑敖嬰児為りしの時、出遊して両頭の蛇を見、殺して之を埋む。帰りて其の母を見て泣く。母其の故を問ふ。対へて曰はく、「吾聞く、両頭の蛇を見し者は死すと。今者、出遊して之を見たり」と。其の母曰はく、「蛇今安くにか在る」と。対へて曰はく、「吾他人の復た之を見んことを恐れ、殺して之を埋めたり」と。其の母曰はく、「汝死せざらん。夫れ陰徳有る者は、之に陽報あらん。徳は不祥に勝ち、仁は百禍を除く。天は之れ高きに処りて卑きを聴く。書に云はずや、皇いなる天は親無く、惟だ徳のみ是れ輔くと。爾嘿せよ。必ず楚に興らん」と。叔敖長ずるに及んで令尹と為る。君子謂ふ、叔敖の母、道徳の次を知ると。

9 『拙誠』（淮南子） 前漢・劉安

孟孫猟而得麑、使秦西巴持帰烹之。麑母随之而噓。秦西巴弗忍縦而予之。孟孫帰求麑。「安在」。秦西巴対曰、「其母随而噓、臣誠弗忍、竊縦而予之」。孟孫怒逐秦西巴。居一年、取以為子傅。左右曰、「秦西巴有罪於君、今以為子傅何也」。孟孫曰、「夫一麑而不忍、又何況於人乎」。此所謂有罪而益信者也。

孟孫猟して麑を得、秦西巴をして持ち帰りて之を烹しむ。麑の母之に随ひて噓ぶ。秦西巴忍びず縦ちて之を予ふ。孟孫帰りて麑を求む。「安くにか在る」。秦西巴対へて曰はく、「其の母随ひて噓び、臣誠に忍びず、竊かに縦ちて之を予ふ」と。孟孫怒りて秦西巴を逐ふ。居ること一年、取りて以て子の傅と為す。左右曰はく。「秦西巴君に罪有り、今以て子の傅と為すは何ぞや」と。孟孫曰はく、「夫れ一麑にも忍びず、又何ぞ況んや人に於いてをや」と。此れ所謂罪有りて信を益す者なり。

10 『立志』（世説新語）南朝宋・劉義慶（編）

周処年少時、兇彊侠気、為郷里所患。又義興水中有蛟、山中有遭跡虎、並皆暴犯百姓。義興人謂為三横、而処尤劇。或説処殺虎斬蛟。実冀三横唯余其一。処即刺殺虎又入水撃蛟。蛟或浮或没、行数十里、処与之俱、経三日三夜。郷里皆謂已死、更相慶。竟殺蛟而出、聞里人相慶、始知為人情所患、有自改意。乃入呉尋二陸。平原不在、正見清河具以情告、并云、欲自修改而年已蹉跎、終無所成。清河曰、「古人貴朝聞夕死。況君前途尚可。且人患志之不立、又何憂令名不彰邪。処遂自改励、終為忠臣孝子。

○周処＝三国時代から西晋の武将。若い頃は乱暴者でよく狼藉を働き郷里の人々に恐れられていたが、行ないを改め学問に励み、文官、武官を歴任して御史中丞にまで栄達した。剛毅な性格で知られた。○遭跡＝辺りをうろつき回る。○義興＝土地の名。○更＝かわるがわる。○二陸＝陸機・陸雲兄弟。陸機（平原）←三国時代の呉から西晋にかけての政治家・文学者・武将。儒学の教養を身につけ礼に外れる行為はしなかったという。陸雲（清河）←陸機の弟。兄と共に「二陸」と称されるほどの西晋時代きっての文学者。

周処年少の時、兇彊侠気にして、郷里の患ふる所と為る。又義興の水中に蛟有り、山中に遭跡の虎有り、並びに皆百姓を暴犯す。義興の人謂ひて三横と為し、而して処尤も劇し。或るひと処に説きて虎を殺し蛟を斬らしむ。実は三横唯だ其の一を余さんことを冀ふなり。処即ち虎を刺殺し又水に入りて蛟を撃つ。蛟或ひは浮び或ひは没し、行くこと数十里、処之と俱にし、三日三夜を経たり。郷里皆已に死せりと謂ひ、更相慶す。竟に蛟を殺して出で、里人の相慶するを聞き、始めて人情の患ふる所と為りしを知り、自ら改むるの意有り。乃ち呉に入り二陸を尋ぬ。平原在らず、正に清河に見へて具に情を以て告げ、并びに云ふ、自ら修改せんと欲するも年已に蹉跎たり、終に成る所無からんと。清河曰はく、「古人朝に聞きて夕べに死すを貴ぶ。況んや君の前途尚可なるをや。且つ人は志の立たざるを患ふ、又何ぞ令名の彰れざるを憂へんやと。処遂に自ら改励し、終に忠臣孝子と為る。

11 『忠犬』（搜神記）東晋・干宝

孫權時、李信純、襄陽紀南人也。家養一狗、字曰黒龍。愛之尤甚、行坐相随、飲饌之間、皆分與食。忽一日、於城外飲酒大醉、歸家不及、臥於草中。遇太守鄭瑕出獵、見田草深、遣人縦火爇之。信純臥處、恰當順風。犬見火來、乃以口拽純衣、純亦不動。臥處比有一溪、相去三五十歩。犬即奔往、入水濕身、走來臥處、周迴以身灑之、獲免主人大難。犬運水困乏、致斃于側。俄爾信純醒來、見犬已死、遍身毛濕、甚訝其事。睹火蹤跡、因爾慟哭。聞于太守。太守憫之曰、「犬之報恩甚于人。人不知恩、豈如犬乎」。即命具棺槨衣衾葬之。

○孫権＝三国時代の武将、呉の初代皇帝。

孫權の時、李信純、襄陽紀南の人なり。家に一狗を養ひ、字は曰はく黒龍と。之を愛でること尤も甚しく、行坐相ひ随ひ、飲饌の間、皆分ちて与に食ふ。忽一日、城外に於て酒を飲みて大ひに醉ひ、家に帰らんとするも及ばず、草中に臥す。遇太守鄭瑕猟に出で、田草の深きを見、人をして火を縦ち之を熱かしむ。信純の臥す処、恰も順風に当たる。犬火の來るを見、乃ち口を以て純の衣を拽くも、純亦た動かず。臥す処に比びて一渓有り、相ひ去ること三五十歩。犬即ち奔り往きて、水に入りて身を湿し、臥す処に走り來たりて、周迴し身を以て之に灑ぎ、主人の大難を免かるるを獲たり。犬水を運びて困乏し、致りて側に斃る。俄爾に信純醒め來り、犬の已に死せるを見るに、遍身毛湿れば、甚だ其の事を訝る。火の蹤跡を睹、因爾慟哭す。太守に聞こゆ。太守之を憫みて曰はく、「犬の恩に報ゆること人よりも甚し。人にして恩を知らざるは、豈に犬に如かんや」と。即ち命じて棺槨衣衾を具へ之を葬らしむ。

12 『名宰相』（春秋左氏伝）魯・左丘明

鄭人游于鄉校以論執政。然明謂子産曰、「毀鄉校如何」。子産曰、「何為。夫人朝夕退而游焉、以議執政之善否。其所善者、吾則行之。其所悪者、吾則改之。是吾師也。若之何毀之。我聞、忠善以損怨。不聞、為威以防怨。豈不遽止。然猶防川。大決所犯、傷人必多。吾不克救也。不如小決使道。不如吾聞而薬之也」。然明曰、「蔑也、今而後知吾子之信可事也。小人実不才。若果行此、其鄭国実頼之。豈唯二三臣」。

○然明＝春秋時代の鄭の大夫。○子産＝春秋時代の鄭の政治家。弱小国の鄭を安定させる善政を行い、中国史上初の成文法を定めたとされる。

鄭人鄉校に游び以て執政を論ず。然明子産に謂ひて曰はく、「鄉校を毀ふは如何」と。子産曰はく、「何ぞ為さん。夫れ人朝夕より退きて焉に游び、以て執政の善否を議す。其の善しとする所は、吾則之を行はん。其の悪しきとする所は、吾則ち之を改めん。是れ吾が師なり。之を若何ぞ之を毀はん。我聞く、善に忠なれば以て怨を損すと。聞かず、威を為して以て怨を防ぐと。豈に遽に止めざらんや。然れども猶ほ川を防ぐがごとし。大いに決して犯す所は、人を傷つくること必ず多からん。吾克く救はざるなり。小さく決して道かしむるに如かず。吾聞きて之を薬とするに如かざるなり」と。然明曰はく、「蔑や、今にして後吾子の信に事ふべきを知るなり。小人実に不才なり。若し果して此を行はば、其れ鄭国は実に之に頼らん。豈に唯だ二三の臣のみならんや」と。

13 『諧謔』晏子春秋　晏嬰に関する言行録・著者不詳

晏子将至楚。楚王聞之、謂左右曰、「晏嬰、斉之習辭者也。今方来。吾欲辱之。何以也」。左右対曰、「為其来也、臣請縛一人過王而行。王曰、何為者也。対曰、斉人也。王曰、何坐。曰、坐盗」。晏子至、楚王賜晏子酒。酒酣、吏二縛一人詣王。王曰、「縛者曷為者也」。対曰、「斉人也。坐盗」。王視晏子曰、「斉人固善盗乎」。晏子避席対曰、「嬰聞之、橘生淮南則為橘、生于淮北則為枳。葉徒相似、其実味不同。所以然者何。水土異也。今民生長于斉不盗、入楚則盗。得無楚之水土使民善盗耶」。王笑曰、「聖人非所與熙也。寡人反取病焉」。

●習辭者←弁舌巧みな人。○熙＝戯れる。●取病←恥をかく。

晏子将に楚に至らんとす。楚王之を聞き、左右に謂ひて曰はく、「晏嬰は、斉の辞に習ふ者なり。今方に来る。吾之を辱しめんと欲す。何を以てするや」と。左右対へて曰はく、「其の来るに為てや、臣請ふ一人を縛し王を過りて行かん。王曰へ、何為する者ぞやと。対へて曰はん、斉人なりと。王曰へ、何に坐すると。曰はん、盗に坐す」と。晏子至り、楚王晏子に酒を賜ふ。酒酣にして、吏二あり一人を縛して王に詣る。王曰はく、「縛する者は曷為る者ぞや」と。対へて曰はく、「斉人なり。盗に坐す」と。王晏子を視て曰はく、「斉人固より盗を善くするか」と。晏子席を避け対へて曰はく、「嬰之を聞く、橘淮南に生ずれば則ち橘と為り、淮北に生ずれば則ち枳と為る。葉は徒だ相似るのみにして、其の実は味同じからず。然る所以の者は何ぞ。水土異なればなり。今民斉に生長すれば盗まざるも、楚に入れば則ち盗む。楚の水土民をして盗みを善くせしむること無きを得んや」と。王笑ひて曰はく、「聖人は与に熙する所に非ざるなり。寡人反りて病を取る」と。

14 『貞節』（漢詩(1)絶句）南史　唐・李延寿

衛敬瑜妻、年十六而夫亡。父母舅姑、咸欲嫁之、誓而不許。乃截耳置盤中為誓乃止。所住戸有燕巣、常双飛来去、後忽孤飛。女感其偏棲、乃以縷繫脚為誌。後歳、此燕果復来、猶帯前縷。女為詩曰、

昔年無偶去
今春猶独帰
故人恩既重
不忍復双飛

○咸＝ことごとく。○偏棲＝一人で棲む。○偶＝つれあい。

衛敬瑜の妻、年十六にして夫亡す。父母舅姑、咸之を嫁がしめんと欲するも、誓ひて許さず。乃ち耳を截りて盤中に置き誓ひを為して乃ち止む。住む所の戸に燕巣有り、常に双飛して来去するも、後忽ち孤飛す。女其の偏棲に感じ、乃ち縷を以て脚に繫ぎ誌と為す。後歳、此の燕果たして復た来たるに、猶ほ前の縷を帯ぶ。女詩を為りて曰はく、

昔年偶無くして去り
今春猶ほ独り帰る
故人恩既に重ければ
復た双飛するに忍びず

15 『気骨』（漢詩(2)律詩）剣南詩稿　宋・陸游

衰病有感　其二

倦枕先鶏覚　寒汀伴雁孤
寂寥誰省録　衰疾且枝梧
鶴骨秋添瘦　亀腸夜自呼
蓋棺吾事定　未敢泣窮途

○陸游＝南宋の政治家で詩人。八十五歳という長寿を全うし、死ぬ直前まで身体健全で目もよく利き読書の傍ら膨大な数にのぼる詩を書き続けた。○倦枕＝眠りが浅いこと。○省録＝心に留めること。○枝梧＝逆らうこと。○鶴骨＝痩せた体。○亀腸＝空っぽのお腹の意。

衰病感有り　其二

倦枕鶏に先んじて覚め　寒汀雁と伴に孤なり
寂寥誰か省録せん　衰疾は且く枝梧せん
鶴骨秋添瘦せ　亀腸夜自ら呼ぶ
棺を蓋ひて吾が事定まる　未だ敢へて窮途に泣かず

実践問題1 『庸間斎筆記』　清・陳基元

蘇城新郭里有浙江慈谿人姜姓、設小薬肆。姜素知医、頗有声。家畜一犬甚馴。姜毎視疾、犬輒随之。有患隔症者、姜誤為虚症、将投補剤。犬向之長嗥。乃改其方、数剤而癒。又有郷人患湿毒。一腿紅腫、不知其名。姜審視未定。犬忽突前嚙之、血流満地、作紫黒色。郷人大号。姜怒撻其犬、既乃知毒蘊於中、非開刀不能出也。敷以薬、遂癒。於是犬医之名大著。然未幾逸去、姜忽忽若有失焉。犬能知医、奇之奇者也。

○忽突＝突然。　○逸去＝逃げ去る。　○忽忽＝失意のさま。

蘇城の新郭里に浙江慈谿の人姜姓なるもの有りて、小薬肆を設く。姜素より医を知り、頗る声有り。家に一犬を畜ひて甚だ馴る。姜疾を視る毎に、犬輒ち之に随ふ。隔症を患ふ者有り、姜誤りて虚症と為し、将に補剤を投ぜんとす。犬之に向ひて長嗥す。乃ち其の方を改むれば、数剤にして癒ゆ。又郷人の湿毒を患ふ者有り。一腿紅腫するも、其の名を知らず。姜審らかに視れども未だ定まらず。犬忽突として前みて之を嚙めば、血流れて地に満ち、紫黒色と作る。郷人大いに号ぶ。姜怒りて其の犬を撻つも、既に乃ち毒中に蘊りて、開刀に非ざれば出すこと能はざるを知るなり。敷くに薬を以てし、遂に癒ゆ。是に於て犬医の名大ひに著はる。然れども未だ幾ならずして逸去し、姜忽忽として失ふもの有るがごとし。犬能く医を知るは、奇の奇なる者なり。

実践問題2 『唐語林』　唐・王讜

検校刑部郎中程皓、性周慎、不談人短。毎於儕類中見人有所訾、未嘗応対。候其言畢、徐為弁曰、「此皆衆人妄伝、其実不爾」。更説其人美事。曾於広坐被人酗罵。席上愕然。然皓竟無怒色。徐起避之、曰、「彼人酔耳、何可与言」。

○唐語林＝唐の王讜により唐代の佳話（心温まる話、美談）や逸事（世間に知られていない事柄）を「徳業」「言語」「政事」等の分類によって集録された書。　○儕類＝同僚。　○酗罵＝酒に酔って罵る。

検校刑部郎中程皓、性周慎にして、人の短を談ぜず。儕類の中に於て人の訾る所有るを見る毎に、未だ嘗て応対せず。其の言畢るを候ひ、徐に弁を為して曰はく、「此れ皆衆人の妄伝にして、其の実は爾らず」と。更に其の人の美事を説く。曾て広坐に於て人に酗罵せらる。席上愕然たり。然れども皓竟に怒色無し。徐ろに起ちて之を避けて、曰はく、「彼の人酔ひしのみ、何ぞ与に言ふべけんや」と。

実践問題3 『涑水記聞』　宋・司馬光

王化基、為人寛厚。嘗知某州、与僚佐同坐。有卒過庭下、為化基喏、而不及幕職。幕職怒、退召其卒、笞之。化基聞之、笑曰、「我不知欲得一喏、如此之重也。向或知之、化基無用此喏、当以与之」。人皆服其量。官至参知政事・礼部尚書、謚曰恵献。子挙正、有父風。官亦至参知政事・礼部尚書、謚曰安簡。

○涑水記聞＝北宋代の文人・政治家である司馬光（撰）の北宋の逸事を著録した書物である。「涑水」は司馬光の出身地である涑水郷にある地名。○知＝長官。○僚佐＝補佐の任に当たる役人。○卒＝兵卒。○喏＝声を発し相手に敬礼する。

王化基、人と為り寛厚なり。嘗て某州に知たりしとき、僚佐と同坐す。卒有りて庭下を過ぎ、化基の為に喏すれども、幕職に及ばず。幕職怒り、退きて其の卒を召し、之を笞つ。化基之を聞き、笑ひて曰はく、「我一喏を得んと欲すること、此くの如きの重きを知らざるなり。向に或いは之を知らば、化基此の喏を用ふること無ければ、当に以て之に与ふべし」と。人皆其の量に服す。官は参知政事・礼部尚書に至り、謚して恵献と曰ふ。子の挙正、父の風有り。官も亦た参知政事・礼部尚書に至り、謚して安簡と曰ふ。

実践問題4 『澠水燕談録』　宋・王闢之

陳堯咨善射。百発百中、世以為神。常自号曰小由基。及守荊南回、其母馮夫人問、「汝典群、有何異政」。堯咨曰、「荊南当要衝、日有宴集。堯咨毎以弓矢為楽、坐客莫不嘆服」。母曰、「汝父教汝以忠孝輔国家。今汝不務行仁化、而専一夫之伎。豈汝先人志邪」。杖之碎其金魚。

○澠水燕談録＝澠水は宋の王闢之が退居した地名。燕談は宴談で酒宴の席での談話。当時の士大夫による談義や紹興年間（1131-1162）以前の雑事を記録している。○陳堯咨＝北宋の官吏・武人。○由基＝養由基。春秋時代の楚の武将。弓の名人として知られ、弓勢の強さは甲冑七枚を貫き、また百歩離れて柳の葉を射て百発百中であったという。○異政＝優れた政治業績。○金魚＝金魚袋。身分の象徴となる金製の魚の形を付けた魚袋。

陳堯咨射を善くす。百発して百中し、世以て神と為す。常に自ら号して小由基と曰ふ。荊南に守りたりて回るに及び、其の母馮夫人問ふ、「汝群を典りて、何の異政有りしや」と。堯咨曰はく、「荊南は要衝に当り、日に宴集有り。堯咨毎に弓矢を以て楽しみと為し、坐客嘆服せざるは莫し」と。母曰はく、「汝の父汝に忠孝を以て国家を輔くるを教ふ。今汝仁化を行ふに務めずして、一夫の伎を専らにす。豈に汝の先人の志ならんや」と。之を杖ちて其の金魚を砕く。

実践問題5 『嘯亭雑録』 清・礼親王昭槤

王文簡公士禎、詩名見重於当時。然浮沈部曹無所施展。張文端公英、代為延誉。皇帝亦素聞其名。因召漁洋入大内、出題面試之。漁洋詩思本遅滞、加以部曹小臣、乍覩天顔、戦慄操觚、竟不能成一字。文端公代作詩草、私置案側、漁洋得以完巻。上笑閲之曰、「人言王某詩為豊神妙悟。何以整潔殊似卿筆」。文端公謝曰「王某詩人之筆、定当勝臣多許」。上因命文簡改官詞林。因之得置高位。漁洋感激文端終身。曰、「是日微張某、余幾作曳白人矣」。

○王文簡公士禎＝清の詩人。官は刑部尚書に至る。○部曹＝行政事務を分担する六つの役所。○施展＝能力・才能を発揮する。○延誉＝名声をあげる。○操觚＝筆をあやつって詩文を作ること。○豊神妙悟＝深遠なこと。○多許＝度量のある。○詞林＝役所の名。主に詔書の起草に当たった。○曳白＝白紙を提出する。

王文簡公士禎、詩名当時に重んぜらる。然れども部曹に浮沈して施展する所無し。張文端公英、代りて延誉を為す。皇帝も亦た素より其の名を聞けり。因りて漁洋を召して大内に入らしめ、題を出だしてこれを面試す。漁洋詩思本より遅滞にして、加ふるに部曹の小臣なるを以てし、乍ち天顔を覩て、戦慄して操觚し、竟に一字を成すこと能はず。文端公代りて詩草を作し、私かに案の側に置き、漁洋以て巻を完くするを得たり。上笑ひて之を閲して曰はく、「人王某の詩を言ひて豊神妙悟を為すと。何を以てか整潔なること殊に卿の筆に似たる」と。文端公謝して曰はく「王某詩人の筆、定めて当に臣に勝ること多許なるべし」と。上因りて文簡に命じて官を改めて詞林たらしむ。之に因りて高位に置くを得たり。漁洋文端に感激すること終身なり。曰はく、「是の日張某微かりせば、余幾ど曳白の人と作りしならん」と。

実践問題6 『萍洲可談』 宋・朱彧

青州王大夫、嘗守舒・丹二州、為詩極鄙俚。毎投献当路、得之者留以為笑具。季父為青掾、王亦与一軸詩。他日季父見其子、乃謝之。其子曰、「大人九伯・乱道、玷瀆高明」。蓋俗謂神気不足者為九伯。豈以一千則足数耶。余中表任朝議大夫、以八秩赦恩、転中奉大夫。其子対賀客則曰、大人転此一官、方始済事。将来、有遺表恩沢」。余記此二事、非以為謔。蓋所以開悟為人子者也。

○当路＝高官。○季父＝末の叔父。○乱道＝詩文がへたなこと。○玷瀆＝汚す。○高明＝相手に対する尊称。

青州の王大夫、嘗て舒・丹の二州に守たり、詩を為れども極めて鄙俚なり。当路に投献する毎に、之を得る者留めて以て笑具と為す。季父青の掾と為り、王も亦た一軸の詩を与ふ。他日季父其の子を見て、乃ち之を謝す。其の子曰はく、「大人は九伯・乱道にして、高明を玷瀆せり」と。蓋し俗に神気の足らざる者を謂ひて九伯と為す。豈に一千を以てすれば則ち数ふるに足るか。余の中表朝議大夫に任ぜられ、八秩を以て赦恩せられて、中奉大夫に転ぜらる。其の子賀客に対すれば則ち曰はく、大人此の一官に転ぜられて、方に始めて事を済さん。将来、遺表の恩沢有らんことを」。余此の二事を記すは、以て謔と為すに非ず。蓋し人の子為る者を開悟する所以なり。

実践問題7　『玉堂叢語』　明・焦竑

羅一峰先生、為人不視悪色、不聴悪声、不恥悪衣・悪食。与人子言依於孝、与人臣言依於忠、与居官者言民疾苦。見一善人、愛之如祥麟・威鳳、見一悪人、悪之如封豕・長蛇。見一飢寒凍餒之人、傾家所有以賑之。大率義之所在、毅然必為。人之毀誉欣戚、事之成敗利鈍、己之死生禍福、皆所不顧也。所交尽一世豪傑之士。其語及先生之為人也、必曰、「晴天白日」。

○玉堂叢語＝明の詔勅作成を行う役所（玉堂）の役人達の言行を集めた書。○焦竑＝中国明代の儒学者・歴史家。○羅一峰＝羅倫・明朝の政治家。○祥麟・威鳳＝麒麟と鳳凰。○封豕・長蛇＝大きなイノシシと長い蛇。転じて貪欲・残忍な人の例え。○欣戚＝喜びと悲しみ。○豪傑＝優れた人物。

羅一峰先生、人と為り悪色を視ず、悪声を聴かず、悪衣・悪食を恥ぢず。人の子と言はば孝に依り、人の臣と言はば忠に依り、官に居る者と言はば民の疾苦による。一善人を見れば、之を愛すること祥麟・威鳳の如く、一悪人を見れば、之を悪むこと封豕・長蛇の如し。一飢寒凍餒の人を見れば、家の有する所を傾けて以て之を賑はす。大率義の在る所は、毅然として必ず為す。人の毀誉欣戚、事の成敗利鈍、己の死生禍福は、皆顧みざる所なり。交はる所は尽く一世の豪傑の士なり。其の語りて先生の人と為りに及ぶや、必ず曰はく、「晴天白日なり」と。

実践問題8　『春渚紀聞』　宋・何蓮

先生臨銭塘日、有陳訴負綾絹銭二万不償者。公呼至詢之、云、「某家以製扇為業。適父死、而又自今春已来、連雨天寒、所製不售、非故負之也」。公熟視之、曰、「姑取汝所製扇来。吾当為汝発市也」。須臾扇至。公取白団夾絹二十扇、就判筆作行書・草聖及枯木・竹石、頃刻而尽。即以付之曰、「出外速償所負也」。其人抱扇泣謝而出。始踰府門、而好事者争以千銭取一扇、所持立尽。後至而不得者、至懐恨不勝而去。遂尽償所逋。一群称嘆、至有涙下者。

○先生＝蘇軾。北宋の政治家。文豪・書家・画家としても名を残す。銭塘の知事を務めていた頃の話。○銭塘＝土地の名。○詢う＝問いたずねる。○故に＝わざと。

先生銭塘に臨みし日、綾絹銭二万を負ひて償はざるを陳訴する者有り。公呼びて至らしめ之を詢ふに、云はく、「某の家扇を製るを以て業と為す。適父死し、而して又今春より已来、連に雨ふりて天寒く、製る所售れず、故に之れを負ふに非ざるなり」と。公熟之を視て、曰はく、「姑く汝の製る所の扇を取りて来たれ。吾当に汝の為に市を発くべきなり」と。須臾にして扇至る。公白団夾絹の二十扇を取り、就ち判筆もて行書・草聖及び枯木・竹石を作り、頃刻にして尽くす。即ち以て之に付して曰はく、「外に出で速やかに負ふ所を償へ」と。其の人扇を抱きて泣謝して出づ。始めて府門を踰ゆるに、好事者争ひて千銭を以て一扇を取り、持つ所立ちどころに尽く。後に至りて得ざる者、懐恨して勝へざるに至りて去る。遂に尽く逋する所を償ふ。一群称嘆し、涙下る者有るに至る。

実践問題９『古夫于亭雑録』　清・王士禎

唐天宝中、有趙生者。其先以文学顕、兄弟倶以進士・明経入仕。生独魯鈍、年已壮、不為群貢。発憤笈数百編、隠晋陽山中。旬余、有翁衣褐造之。謂生曰、「子志甚堅。老夫雖無術有補於郎君、幸一謁我耳」。且曰、「吾段氏。家於山西大木之下」。言訖、忽亡所見。生遂往山西尋其跡、果有椴樹甚茂。生曰、「此所謂段氏者乎」。遂以鍤発其下、得人参、長尺余、肖翁形貌。生曰、「吾聞、人参能為怪者、可癒疾」。遂瀹而食之。自是、豁然明悟、目所覧書、尽能窮其奥。歳余、明経及第。

○其先＝先祖。○群貢＝群の試験の合格者。○旬余＝十日余り。○椴樹＝アオイ科の落葉高木。○怪＝怪奇現象。○瀹＝煎じる。

唐の天宝中、趙生なる者有り。其の先は文学を以て顕し、兄弟倶に進士・明経を以て入仕す。生独り魯鈍にして、年已に壮なるも、群貢と為らず。発憤して数百編を笈ひ、晋陽の山中に隠る。旬余にして、翁の褐を衣て之に造る有り。生に謂ひて曰はく、「子の志は甚だ堅なり。老夫術の郎君を補ふもの有ること無しと雖ども、幸はくば一たび我を謁へ」と。且つ曰はく、「吾は段氏なり。山西の大木の下に家す」と。言ひ訖り、忽ち見る所を亡ふ。生遂に山西に往きて其の跡を尋ぬれば、果して椴樹の甚だ茂る有り。生曰はく、「此れ所謂段氏なる者か」と。遂に鍤を以て其の下を発けば、人参の、長きこと尺余にして、翁の形貌に肖るを得たり。生曰はく、「吾聞く、人参の能く怪を為す者は、疾を癒すべし」と。遂に瀹して之を食ふ。是より、豁然として明悟し、目の覧る所の書は、尽く能く其の奥を窮む。歳余にして明経に及第す。

実践問題１０『除夜宿石頭駅』　唐・戴叔倫

除夜宿石頭駅　戴叔倫

旅館誰相問　寒灯独可親
一年将尽夜　万里未帰人
寥落悲前事　支離笑此身
愁顔与衰鬢　明日又逢春

除夜石頭の駅に宿る　戴叔倫

旅館誰か相ひ問はん　寒灯独り親しむ可し
一年将に尽きんとする夜　万里未だ帰らざる人
寥落として前事を悲しみ　支離として此の身を笑ふ
愁顔と衰鬢と　明日又春に逢ふ